

## 千葉徳夫さんのこと

岡野 誠

一九九六年三月十三日未明に同僚である千葉徳夫氏は突然逝去された。享年四十九。今でも全く信じられない思いがするが、これは否定しようもない事実である（以下においては、「千葉さん」と書くこととする）。

昨年の手帳を取り出してみると、三月十一日（月）は、年度最後の教授会の日で入学試験に関するすべての業務を終え、恒例の打ち上げが行われた。試験委員であった千葉さんも、当然打ち上げには参加していた。その日は夕刻から大学の近くで、基礎法の或る教授の退職を祝うささやかな会合が開かれ、彼も私も馳せ参じ、雑談に楽しい一時を過ごした。そして神保町の銀行の前で千葉さんと機嫌良く別れたのは十時頃であったと思う。

一日おいて十三日（水）の午後二時に、千葉さん、村上さんと私は、法制史学会の件で打ち合わせをする事になっていた。その日午前中に学部事務室に向き、同日未明、千葉さんが急逝されたことを知らされた。

千葉さんは、一九四六年に岩手県江刺市に生まれ、山形大学文理学部を卒業後、早稲田大学大学院文学研究科（修士・博士課程）を修了され、一九八三年に明治大学法学部専任講師となり、八七年助教授、九二年には教授に昇格されている。

一九八三年より少し前、私共は西洋法史の専門家を求め、人材を物色中であった。直接交流のある人々の中に条件にかなう人がおらず、そのためのささか無謀ではあったが、当時学界で活躍の目立つ若手研究者をリストアップして、

その中から選ぶという方式をとった。その時全く偶然に千葉さんが最終面接に残ったのである。したがって島田正郎・鍋田一両先生は勿論のこと、私もそれまで彼とは全く面識がなかったのである。

千葉さんの大学院時代の恩師の一人が、彼を評して「スロースターター」と言ったそうだが、まさに努力の人である。千葉さんは、大学院の後半あたりから徐々に加速し、ついには学界の第一線で活躍する学者となったのである。

千葉さんは多忙の中にあっても、次々と重厚な優れた論文を発表し、書評を書き、さらに依頼があれば、多くの非常勤講師も快く引き受けた。しかし今から思うと、その生き方にはあまりに加速がつきすぎていたのではなからうか。「中年クライシス」という言葉もあるように、五十歳を目前にして、仕事量の調節や健康への配慮も必要であったのではないだろうか。

千葉さんが亡くなられた後、関連学会は様々な形で千葉さんの人柄を偲び、その業績を高く評価している。

大学院時代の指導教授であった野崎直治氏（早稲田大学名誉教授）に献呈するため、千葉さんが中心となって翻訳したハンス・K・シュルツェ氏（マールブルク大学教授）の『西欧中世史事典』も、小倉欣一氏（早稲田大学教授）らのご努力によって今春無事刊行された。その序文でシュルツェ氏が、またあとがきで小倉氏等が、千葉さんの突然の逝去を心から惜んでいる。

法制史学会は、阪口修平氏（中央大学教授）による「追悼の辞」を『法制史研究』第四六号（一九九七）に掲げている。さらに比較法史学会も『比較法史学会会報』第六号（一九九七）に、山内進氏（一橋大学教授）による追悼文を載せている。両氏ともに千葉さんの学問のよき理解者である。

また私共の法史学研究会の『法史学研究会会報』第二号（一九九七）は、「故千葉徳夫教授追悼特集」を組んでおり、野崎直治・小林宏（国学院大学教授）・野口洋二（早稲田大学教授）・小倉欣一・阪口修平・山内進・神宝秀夫（九州大

学教授）・佐久間弘展（昭和女子大学専任講師）さらに本学部の土屋恵一郎・増田豊・加藤哲実諸氏の追悼文を収めている。

千葉さんの研究テーマはドイツ中世・近世の国制史にあり、近年では小国の歴史的意味、宮廷の機能、さらに社会的規律化などの諸問題の解明に力点が置かれていた。彼の仕事に関しては全くの門外漢の私ではあるが、その論文、例えば「十七世紀ゴータ侯国のお上（Ortsherr）と教育」などは、視点が実に魅力的で、かつ文章が誠にのびやかで、一読して大変圧倒されたことをよく覚えている。

千葉さんは、私とほぼ同年であり、研究や雑事について気軽に語り合える仲間であった。とくに教授会や講座の打合せの後など、お互いの研究室で、鍋田一先生を中心にしての雑談は、まさに中国六朝期の「清談」（清い話ばかりではないけれど）であって、食事を忘れ、帰宅の時間も忘れて語り合ったものだ。今はその折の話の切れ切れが雲のように思い浮かぶばかりである。

千葉さんは在外研究でドイツに行かれるまで手からタバコを放さなかった。それが帰国後は一変して禁煙党（どちらかと言えば嫌煙党）の仲間となった。千葉さんの説明によると、ドイツで気候の変化のせいか急に鼻血が止まらなくなり、初めて救急車に乗せられ（この部分は少々自慢話に近かったが）病院で手術を受けた。運悪く直前に旅行保険が切れていて、かなりの出費となった。今後は禁煙してその分を取り戻すのだという。何だか分かったような分からないような話であるが、私にとっては大いに歓迎すべき転向であった。

千葉さんは周知のごとく極めて真面目な人である。少々頑固なところもあった。しかしもっと頑固な私が側にいるので彼のその面はあまり目立たなかった。千葉さんには深いユーモアの感覚があり、それは東北の風土に根差す実に温かいものであった。彼の学生時代の話など、大いに笑わせられたが、今はもう本人の許可が得られないので書

くことができない。

同時に千葉さんは大変親しいの人でもあった。御母堂は早く亡くなられたようだが、御尊父は九五年秋には病床にあり、彼は週末ごとに、入院先の秋田まで見舞いに出かけていた。それ以前のことだと思つが、父親を自動車に乗せ、見たいと思う所どこへでも行くのだが、東北の郊外は道が悪くて、という話も聞かされた。その御尊父が長い闘病の末亡くなられたのは九五年晩秋であったが、千葉さんは恐らく本人も自覚しない形で強い衝撃を受け、深い疲労感に捉われていたのではないだろうか。そして同じ頃法学部試験委員としての劇務が始まり、益々疲労が蓄積していったものと思われる。

しかしこのような突然の厳しい事態にも拘らず、夫人の昌子さん、長男の周太郎君、長女の純子さんは、気持を励まし手を取り合つて乗り越えつつある。私はその姿に安堵するとともに、お子さん達の健やかな成長を願わずにいられない。また今後在天の千葉さんに少しは褒めてもらえるような仕事をしなければと、村上さんと語り合っている。